

# 社会的なものゝと個人的なものゝにおける非決定性の関係論

——規律社会から管理社会への移行をめぐる——

野村 明 宏

## 序

社会理論に付きまとう解答困難なアポリアのひとつには、社会と個人のいずれが先行して存在するかを問う問題構制がある。一般に社会学においては、人間を「社会的存在」として論じ、社会が個人に先行しているということを基本的な視座として提示してきた。諸個人の認識や行為は、自らをとりまく社会的諸条件によってアプリオリに規定されていると捉えるこうした視座は、合理的な判断や自由意志に基づいて主体性を発揮するものとみなす近代的人間像に対するアンチテーゼとしての意味をもっていたといえよう。周知のとおり、主体の脱中心化を説得的に論じた構造主義もそうした知の系譜に連なるものであるが、構造主義の超克を目指すなかでは、失墜しかけた主体性の復権を模索する企図も現れてくる。端的には、それらは社会と個人の相互規定的な関係を理論化することによって、個人主体が一定の自律性を備えていることを提示しようと試みてきたのである。

本稿では、社会と個人の関係をめぐるそうしたこれまでの社会理論の基本的な枠組みを検討し、それらの理論的有効性の範囲を限定した上で、現代社会の分析には視座の転回が必要であることを提示する。そして、そこからもたらされる知見は、現代における社会と個人の関係そのものをあらためて捉え直すことになるだろう。

社会的なものゝと個人的なものゝにおける非決定性の関係論

一 行為と実践、ふたつの構造化

社会学における客観主義と主観主義

「構造」という語を社会学の有用な術語として使用しつづけるならば、構造概念は「行為」や「実践」との相関の中であらためて練り直される必要がある。こうした主張は、構造主義に対する批判的検討の時期を迎えた一九七〇年代から現れるが、その際に問題とされた争点は、主体を脱中心化する構造決定論だった。諸個人を超越する構造が意識や行為をあらかじめ常に規定し、制約しているときみなす構造主義に対して、異議申し立てが唱えられてきたのである。ただしそれは、構造主義が提示した主体⇨従属の理論から、自由意志や自己決定権を要求する近代社会の人間像へと単純に回帰させようとするわけではない。実践や行為の論理を検討するねらいは、「構造と主体」、あるいは「社会と個人」という二項関係を、「決定論」と「自由意志論」のいずれかに委ねるのではなく、両項の相互規定的な関係を示す理路を模索することにある。換言すれば、それは客観主義と主観主義という伝統的な二元論的な分離を、二者択一を強いる対立としておくのではなく、実践や行為のプロセスの中で捉え直し、両者の超克をはかる試みであるといえよう。

こうした立場は、社会学の既存の理論枠組みに対して批判的な検討を加える意図を同時に含んでいる。というのも、それまでの社会学理論は、そのディシプリンの発展のなかで多極化がともなったとはいえず、大別すれば客観主義と主観主義に分けることができるからである。前者には、デュルケームのような実証主義や構造主義、機能主義等が含まれ、後者にはウェーバーの理解社会学から現象学的社会学、エスノメソドロジーなどの理論的潮流が含まれる。このように二分可能な社会学のバースペクティヴは、ビエール・ブルデューの言葉を借りれば「社会物理学」と「社会現象学」と呼び換えることもできる。端的にいうと、客観主義ないし社会物理学と呼ばれるアプローチは、前述のとおり、個人の意図や動機を超える社会システムや構造による拘束に重点をおいて、物理法則のように外在する機制の客観的な解明をお

こなり。他方、主観主義あるいは社会現象学的なアプローチは、第三者が客観的にみれば状況の誤認に捉えられようとも、諸個人の日常的に生きられた経験のなかでは、確固とした意味づけをもって占められている主観的、現象学的世界の把握のあり方を描出するものである。いうまでもなく両者の主張を極端化すれば、単なる分析対象の住み分けではなく、互いを相殺する結論に陥ることもなる。

客観主義と主観主義のアンチノミーは、まず第一につきのようなものが挙げられる。すなわち、客観主義的なアプローチを徹底化すれば、客観主義者の認識自体の主観性が問われることになる、というものである。客観主義的な社会学の主張は、人間が社会的に決定された存在であるということなので、これは観察者自身にも適用されなければならない。しかしそうなれば、観察者の「客観的認識」も、バイアスをもった社会的拘束を受けていること（存在被拘束性）になり、対象の客観化が可能な純粋に客観的な観察者は存在しえないこととなる。つまり客観主義者は、自らの論理によって脱構築される。それゆえ、客観主義には、ブルデューのいうように「客観化する主観を客観化する」という作業が要請されなければならないのであり、観察者自らの主観性に対する反省的な分析アプローチを伴わざるを得ない。<sup>1)</sup> 言い換えれば、対象認識の中に投射される観察者と観察対象の関係をとも対象にすることである。それと同時に、主観主義的アプローチがもつ象徴的な次元での間主観的な相互作用を——社会学的认识も含めて——対象にしなければならぬ。

また別の点からいうならば、このふたつのアプローチは一方の立場によって導かれる結論が、他方の前提になっているために相互の結論を否定し合う。客観主義の立場にたてば、諸個人の主観は、共有された価値や規範、ニーズなどを構成する構造の基礎づけがない限り成立しえないと論じられる一方で、主観主義の観点からは、行為者主観の動機付けや願望がない限り、構造や機能の抽象的な実体が存在しえないと反論されることになる。たとえば、ネイティヴ・アメリカンのホピの雨乞いの儀式を、例にとってみよう。R・K・マートンの機能主義的分析によれば、この儀式はたと

意図された目的（雨を降らせること）が達成されていなくとも、意図せざる結果として集団の凝集性を高める潜在的機能を果たしていることが指摘される<sup>(2)</sup>。一見非合理的にみえる行動に集団が従事している理由に対して、客観主義的アプローチであれば、このような結論を導くだろう。しかし、このマーソンの分析で決定的に欠けているのは、アンソニー・ギデンズの指摘にあるように、雨乞いの儀式が継続される機制に答えられない点である<sup>(3)</sup>。行為の意図せざる結果が与える潜在的機能は、儀式が遂行される理由にはならない。結局のところ、儀式の参加者のもつ主観的な認識や動機分析がなければ、なぜ儀式が繰り返されるのかは把握できない。

要するに、主観主義と客観主義はともに、当事者の生きられた経験（一次的経験）と観察者が解明する客観的認識とを関係づけられないために、実践を理解できないのである。したがって必要な視点の変更は、科学的知が、自らの客観的認識を当事者の一次的経験や認識よりも優位性をもたせるのではなく、むしろ当事者自身の認識主観を構築している客観的原理を客観化することに焦点を合わせることである。つまり、自由意志によって内発的に成立するように当事者にはみなされている主観のあり方を、学的な観察者の視点は、その主観の背後にあって制約し規定づける客観的な機制を客観的に抽出することが要請されているというわけだ。こうしたバースペクティヴは、構築されている社会秩序に対してもつ当事者の主観や実践の意味を、客観的に捉えることを可能にするのである。

このような視点の変更によって主観主義と客観主義の対立を克服し、社会と個人の二項関係をトータルに捉えようとするためには、本章の冒頭に示したとおり、構造を行為や実践の論理との関わりの中で再検討することが必要となる。とはいえ、そのための手掛りは、以上の問題点の指摘のなかですでに与えられている。それは、二点あるといえよう。第一に、行為の帰結には行為者の目的からは遠ざかっていく意図せざる結果がともなっていること。そして第二に、行為の基盤には当事者による状況の誤認がある、という二点である。このためのアプローチは、状況を解釈している行為者の主観を対象にしながら、同時にそれが形成される客観的なメカニズムをも対象にするということである。つまり、

ここで検討の対象となるのは、主体の誤認を形成する基盤としての「構造」と、行為者の予期できない結果として形成される「構造」であり、両者の関係性である。機能主義のように社会秩序を維持する諸機能の連関パターンとして構造（あるいはシステム）を捉え、行為者の意図や動機を不問に付すのではなく、また構造主義のように主体の認識や行為を決定するプログラムとして構造を理解するのでもなく、むしろ誤認を産み出すものとして、あるいは行為に付随する意図せざる結果によって産み出されるものとして、「構造」概念をあらためて練り直すことが焦点になっているのである。

### 構造化と行為——ギデンズ

したがって、行為が遂行されていくなかで継起する動態として構造を考えてみるならば、「構造化」というプロセスこそが実在的だといえることができる。ギデンズは、自らの社会学理論を「構造化理論」と名付け、行為が当事者の意図や目的に沿っておこなわれるなかで、その行為が意図せざる結果を産み出していることに構造化の契機をみている。構造は行為のプロセスのなかで産出され、同時にその構造が帰帰的に行為の条件を付与するという二重性を備えている（構造の二重性）。そのためギデンズの理論体系においては、諸個人は構造によって厳密に規定された主体＝従属 subject ではなく、構造からある程度自律しながら能動的に構造化に関わっているとして、行為体 agent や行為者 actor という語が採用される。この「行為者」がある程度自律しているといえるのは、絶え間なく流れる生きられた経験のなかで、行為の外的条件（構造としての規則や資源）に制約を受けながら、それを反省的に振り返りモニターすることによって認識し、その限定のなかで自らの目的に沿った行為を意識的に制御し実行しているとみなされているからだ。ギデンズは、こうした行為者の持つ能力を「認知能力 knowledgeability」と呼び、それが「言説的意識 discursive consciousness」と「実践的意識 practical consciousness」という二種類の意識によって構成されているとする。まず言説的意識<sup>(4)</sup>

とは、行為の社会的条件や自らの行為の条件について言語によって表現可能となっているものであり、一方の実践的意識とは、マイケル・ポラニーのいう「暗黙知」のような、言語によっては表現不可能であるが、行為のために利用されている非言語的知識の膨大なストックを基礎においた意識である。たとえば、細かな文法規則そのものを説明できなくとも、その法則に沿った言語活動を可能にしているものが実践的意識である。これらの意識が、行為者の目的や動機づけに関わり、合理的な判断に基づいた行為を遂行する。もちろん、行為者が状況を解釈し、それに応じた構想を練って行為をおこなう能力を備えているということは、近代的個人の行為の連続きとして常識的認識であり、取り立てて言挙げする必要はないだろう。ここで付言しなければならないのは、こうした行為者の認知能力にも関わらず、行為が意図せざる結果を産み出しているということである。行為者は、自らの行為のその時々<sup>(5)</sup>の社会的諸条件について、完全に把握できず、そのために意図どおりの結果を必ずしも産出するわけではない。行為の諸条件と意図せざる結果は循環しているために、意図せざる結果は、つぎの行為の条件を構成することになり、行為者は常に認識不可能で不確定な条件が与えられるのである。そしてだからこそ、その行為は、知られざる条件となる意図せざる結果を必然的に産み出すことになる。<sup>(5)</sup>この循環は、先述した誤認を形成する構造と意図せざる結果によって形成される構造が、メダルの表裏のような関係にあることを示している。

ギデنزの概念化している行為者は、思考が状況を再帰的にモニタリングし、自らの行為を制御するために、構造を変換する能力を備えていることになる。行為は本質的に時間の中で展開するものであるため、行為の以前と以後の構造は、必ずしも同じものではなく変容する可能性をもつ。生きられた経験的世界では行為を媒介にして、構造化が常に既に継起しているのである。たとえば、自分の考えを伝達するために言語を多様なかたちに変換して使用するプロセスには、言語構造（ラング）の微細な変容が付随する。ひとつの言語に時代ごとの変遷があるのは、ソシユールの構造化主義言語学とは異なり、このような行為（バロール）と構造（ラング）の相互依存関係によって示されるのである。

しかしながら、所与の構造の同一性が恒常的に維持されるという意味では、行為は再生産のメカニズムに組み込まれている。このことから構造とは、行為を産出する変換の機制であることがわかる。行為は、限定された空間内部で構造化を実現しており、構造の再生産のために代行的な機能を果たしているのである。つまり、構造化理論が概念化している行為には、行為者（主体）と構造の関係の媒介的役割が強調されているゆえに、あたかもあらゆる行為が、構造に還元され包摂されていくものようになっていく。行為の目的と結果の間にある矛盾を構造化の契機として捉えることは、社会秩序に対する逆機能的な行為すらも構造化に寄与することを示す。というよりも、ギデنزは正機能／逆機能という区別を廃棄することで、構造化理論を体系化しているのである。

もちろん、客観主義的アプローチと主観主義的アプローチのそれぞれがもっていた欠点そのものを、構造を生産し続ける契機として積極的に取り入れ、行為を媒介とした構造と主体の関係を理論化できたのは、ギデنزの理論的な創意といえよう。行為者は、構造によって制御されている自動人形オートマトンではないが、認知能力に基づく自律的な行為が、観察者の視点からみれば、構造の再生産に結果的に従事しているという逆説的状况を示すのは、構造化理論のもつ独特の着想といえるだろう。

しかしギデنزは、きわめて巧妙な機制が存在しているようにこの理論をまとめているのではないだろうか。行為者は、思考による判断をふまえて自覚的に行為を遂行するにも関わらず、結果的に一定の秩序を備える構造の再生産に寄与するということは、この局面だけをみれば、奇妙な予定調和である。行為は多様な結果を産み出すが、その多様性が構造を散逸させずに、構造の（再）生産に加担してしまふということは、自覚的な行為を制御するようなメタレベルの社会的構造があることにならないだろうか。

構造の再生産の分析に別の視角を導入するならば、思考に基づかれた行為ではなく、むしろ無思考的なかたちでなされている行為に注目する必要があるだろう。ギデنزは、行為者の認知能力が及ばない「行為の知られざる条件」と

「意図せざる結果」の相関関係に、構造化の機制をみた。しかし、行為者の認知が届かない不確定な状況に対して、行為者自らが獲得している身体化された行為が即興的な対応を可能としているとするならば、それはどのようなものなのか。

### ハビトウスと実践——ブルデュー

ブルデューの社会学は、ギデンズと同様、客観主義と主観主義の超克がモティーフにあり、また構造概念の練り直しを行為の動的なプロセスにおいて追求することから、ギデンズの構造化理論との類似性を指摘されることが多い。しかしブルデューの場合、ギデンズの理論枠組みでは大きな位置を占めていない行為の別の側面、つまり思考を伴わない慣習化された行為の領域を重視することで、ギデンズとは決定的に異なっている。ギデンズのいう諸個人の「認知能力」に基づく行為 action は「プラクシス praxis」というマルクス主義的な実践概念に類似し、ブルデューのいう「慣習的実践 pratique」とは厳密に区別されなければならない。

ブルデューの実践pratiqueへの注目は、北アフリカ・マダグレブ地域やフランス・ペアルン地方におけるフィールドワークをとおして得た知見に基づいている。日常の生活空間では、恒常的に守られる厳密な公理系があるわけではなく、むしろ「不透明で、状況の論理、状況が押しつけるほとんど常に部分的な観点に依りて変動を余儀なくされる実践的図式」<sup>(6)</sup>があり、人々の生きられた経験は、それを基盤にして産出されるとする。偶発性を帯びた不確定な状況は、言説的に明示することも、意識的に自覚することもできないために、ギデンズのいう行為者の認知能力の閾を超えている。ただし、その理由は行為者の意図せざる結果と行為の知られざる条件との循環関係にあるというよりは、行為者を取り巻く複雑な状況そのものに求められている。しかも、こうした存在論的な不確定性をはらんだ不透明な状況に対しては、構造主義的な観察者だけがモデル化できる構造が、諸個人を超越して認識や行為をアプリオリに決定していることにもな



らない。たとえば、ブルデューがフィールドで発見したことは、構造主義人類学が「規範」とみなしてきた平行イトコ婚が、実際にはきわめて低い頻度数でしか確認されず、女性の交換から導出されるような構造を实体化して捉えられないということだった。実際の親族関係は、「物質的、象徴的利潤の極大化を目指す戦略体系内でのその位置」<sup>(7)</sup>によって多様な変化を受けている。実践の論理は、無時間化された構造に還元できるものではなく、時間の流れの中において生起する「配偶者間の系譜的・経済的・社会的関係内の局所的な変化、同時に儀礼によって承認される結婚の社会的意義と社会的機能のなかでの変化」<sup>(8)</sup>に影響を被るものである。それゆえ、日常生活のリアリティを前にしてみえてくるものは、「完全に首尾一貫していることも、完全に首尾一貫しないことも、めったにない」<sup>(9)</sup>という、きわめて曖昧ではあるが、しかし実践の論理が示す柔軟性である。このような実践を産出する基盤を、ブルデューは「ハビトゥス habitus」という術語によって概念化するが、それは以下のように定義される。

「ハビトゥスとは、持続性をもつ交換可能な心的諸傾向 dispositions のシステムであり、構造化する構造 structures structurantes として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する傾向を予め与えられている構造化された構造 structures structurées である。そこでは実践と表象とは、それらが向かう目標に客観的に適応させられうるが、ただし目的の意識的な思考や、当の目的に達するために必要な操作を明白な形で会得していることを前提してはいない。実践と表象はまた、客観的に「調整を受け regle」「規則的 régulier」でありうるが、いかなる点でも規則 regle への従属の産物ではない」<sup>(10)</sup>。

ハビトゥス概念によって捉えられる行為の様態は、行為者が経済的な利潤や、地位や名譽のような象徴資本を獲得するために能動的に実践に取り掛かりながらも、そのプロセスは、複雑な状況下で無思考的な即興を可能にするハビトゥスによって産出されているというものである。そして、ハビトゥス自体もそうした実践の蓄積によって再帰的に構造化されている。構造主義の「構造」が、当事者と無関係に存在し、主体の認識や行為を機械的に決定することを示してし

まうのとは異なり、ハビトゥスは「構造化する構造化された構造」という両義性を備えていることを示す。つまり、行為者はハビトゥスの支えがなければ状況に臨機応変に対応しえなると同時に、ハビトゥス自体も実践が堆積していくなかではじめて組成し実体化しているのである。ハビトゥスと実践の関係は相互に規定し合うものであり、それゆえ行為者はハビトゥスを再生産しているとはいえ、単に従属しているということにはならない。

しかし、ここで確認しておくべきことは、ハビトゥスが単純な社会決定論と主意主義（自由意志論）のいずれをも回避するとはいえず、その効力がおよぶ範囲は、階級や家族のような関係性が再生産されているステータックな社会的環境に限られているということである。というのもハビトゥスは、日常の生活空間において他者を模倣することによって徐々に身体化され習得されるものであり、実践のやり方だけでなく、動機や目的にも一定の制約を与えているからである。行為者は、経済資本や象徴資本の極大化を意識的に目指すとしても、それは所属している意味世界において成員に共有され、承認されている価値体系に準拠している。行為者の判断は、たとえば地位や名誉の内実が社会的、象徴的価値によって常に既に分節化され、方向づけられているために動機自体もハビトゥスの産物となる。端的には、実践の目的や願望は、所与の社会内での実現可能性に応じて客観的に規定されている。ただし、それにも関わらず、当事者は「自らの在り様」に照応した実現可能性の高い行為を選択する傾向をもつことによって、自らの判断をあたかも内発的で自然なものであるように誤認するのである。

したがって、ブルデューがいうように「実践を説明できるのはただ、実践を産み出したハビトゥスが構成される場<sup>11</sup>なす社会的諸条件と、ハビトゥスが効力を発揮する場である社会的諸条件とを関連させる時だけ」であるということは、実践の可能領域は限定的であることを意味している。ハビトゥスは限定的な「場 (champ)」(たとえば、階級や家族、宗教、ジェンダー、エスニシティ、芸術、政治などの世界)と結びついて、はじめて実践の目的意識とそのやり方が合致するのである。ハビトゥスが、実践を「構造化する」構造であると同時に、「構造化される」構造である

いうことは、ハビトゥスには実践の動機付けに関わっている側面と、そのやり方に関わっている側面があることを指していると言ひ換えられよう。したがって、ハビトゥスのふたつの側面が整合的に一致するのは、行為者の実践が場内属していることが不可欠な条件となる。ブルデューは、それを「ハビトゥス×資本十場＝実践」と定式化している。<sup>(12)</sup> 行為者はけっして「合理的 rational」な思考によって実践をおこなうわけではないが、それが結果的に「理に適った reasonable」ものとなるには、どのような場でも構わないわけではない。たとえば、共同体の外部からきた「よそ者」が、その場の価値体系に依拠して状況の判断や実践の目的を構成したとしても、その実践が理に適わず齟齬をきたすとなれば、認知と実践がそれぞれ異なるハビトゥスによって組織化されているからである。つまり、ハビトゥスは状況に応じた無際限の変換可能性をもつとはいえ、その一貫性が効力をもつ磁場は、相対的に自律した環境内部に限定されている。諸個人が身につけているハビトゥスは、成員が外部に出ることも、外部から異質なものを迎え入れることも困難にさせているのである。要するに、ハビトゥスは異なる社会的諸条件をもつ場の相互交流を阻害する排他性を本質的に備えている。換言すれば、ハビトゥスは固有の場によって再生産されると同時に、その場を再生産しているのである。たとえば、階級差別や女性差別、人種差別のような支配―被支配関係が再生産され続けるのは、場を再生産するハビトゥスの持続性が大きな原因である。現行の体制を打破し改変しようとする平等主義や解放思想が、言説空間においていかに正当性を得ようとも、既存のハビトゥスによって身体化された生活様式は、支配側だけでなく被支配側にも自然化されて持続するために、現実の変革は達成されがたいのである。

## 二 再生産と創造、あるいはふたつの主体化

### ブルデューの社会批判の立場

ギデンスとブルデューの議論をとおして提示されたことは、社会と個人が実践を媒介として相互規定関係にあるとい

うことだった。諸個人の認識や行為は、一定の能動性をもって自律していることが確認されたが、その主体性は結果的に社会構造の再生産に加担しているという逆説をもつために、構造そのものの変動がいかに起こりにくいものであるかも同時に確認される。

たとえば階級構造の維持は、支配的イデオロギーによる強制や抑圧によるのではなく、むしろ対抗文化自体が積極的に関わっているとさえいえる。ポール・ウィリスの『労働のための学習 *Learning to Labour*』（邦題『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗 労働への順応』）が、実証的に論じたことはそのような例として挙げられるだろう。イギリス労働者階級の男子生徒数名への聞き取りを中心に編まれたこのエスノグラフィは、学校教育のなかで形成される対抗文化が、実際には階級構造の再生産のプロセスに埋め込まれていることを明らかにする。労働者階級の生徒が下層の肉体労働に就くことになるのは、学校教育に本意ながらも落ちこぼれた結果であるというよりは、学校文化と「知的」労働を貶値し、肉体労働を賛美する対抗文化のなかで、自らの職業として積極的に選んだ結果であることが析出される。G・マーカスが簡潔にまとめているように「学校で上層階級の教え込みに対する反抗が生みだした文化形式は、皮肉にも、卒業後、彼らが工場労働者としての生活に順応するための適応手段<sup>(13)</sup>」となっているのだ。労働者階級のハビトゥスは、学校文化に順応することに価値を見いださず、「知的」労働をつまらない「ペン先の仕事」とみなし、逆に肉体労働を真にやりがいのある仕事として進んで選んでいく。そしてそれが意図せざる結果として労働者階級とそれを含み込む階級構造を維持するのである。このように、支配文化への抵抗の文化は、「自由と満足と体制離脱を表現し、同時に他方では労働する人びとを搾取と抑圧の制度に封じこめる<sup>(14)</sup>」という一見相矛盾する事態を両立させている機制の一構成要素となっている。

ブルデューもまたウィリスと同様の観点から、「抵抗が疎外的たりうるし、服従が解放的たりうる」場合があるという逆説を十分に承知している。支配や権威への抵抗が結果的に自らを従属の位置へと自発的に赴かせることになり得る

し、逆に支配文化の教養や学問を追随し、そのハビトゥスに阿る結果が、立身出世のようなかたちでの解放を導くこともあるというのである。こうしてブルデューにとつての支配構造に抵抗する方法は、対抗文化の形成ではなく、支配文化内部でその論理に則った闘争に限られることになる。

付言すれば、以上のような立場は、当事者の主観的判断を分析対象にし、それを客観的な社会構造のなかで捉え返し、客観化することによって導き出されている。したがって、ハビトゥス概念の導いた社会構造の恒常性、あるいは社会変動が困難であるという認識を前にするとき、自らの布置関係を相対化し、現状の客観的認識に徹するいわゆる社会学的啓蒙こそが、良くも悪しくも、とりあえず要請されるべき手続きとなるのだろう。ブルデュー的な社会学的パースペクティヴが採りうる社会批判の立場は、少なくともそのような迂回戦略をとることになる。

「主観性の場所と称されるもの（例えば、思考・知覚・評価の社会的カテゴリーであり、これらはいわゆる客観的世界の表象の思考されざる原理である）に取り憑く客観性を客観化することによって真実の自己再獲得を可能にする。〔……〕社会学は、諸制約の自覚をもってする他はないにせよ、主体という何ものかの構築（……）に役立つひとつの手段、おそらくは唯一の手段を提供するのである」<sup>16</sup>。

ハビトゥスが自己の認識や行為に背後から重く押し掛かっているという状態を客観的に提示することが、翻って主体イコール従属ではなく、自己の判断が自己によるものとなる自律した主体の実現のための道を拓くとブルデューはみる。ただし、これが「理性の現実政治」<sup>17</sup>を唱えるブルデュー社会学の示唆する重要な戦略であることは認められるとしても、批判的実践の有効な手段になりうるのかは、留保しておくべきである。少なくともいえることは、「服従が解放たりうる」という状況は、単に諸個人のミクロな位相での階層移動を示すのであって、マクロな階層構造そのものは解消されないということである。ブルデューのいう意味での抵抗が、支配文化の論理内での真理の生産をめぐる闘争にしかあり得ないとする主張は、普遍性や権威、正統、中心といったカテゴリーを承認することでもありということに注意を払っ

ておくべきだろう。

### 主体の構築性と決定性

ブルデューは、実践のもつ再生産の機制を乗り越える手段として、結果的にギデンズのな行為者の認知能力がもつ普遍的理性に頼らざるを得なくなる。個人の存立条件がハビトゥスという無思考的位相において与えられているにも関わらず、それを諸個人が思考によって乗り越えようとする試みは、根本的なアポリアに陥るようにもみえる。構築主義や構築主義の直面する苦境と同じく、社会体制を瓦解させる方途をその体制によって構築された主体自身に求めることが果たして可能なのかという原理的な疑義が立てられるのだ。

とはいえ、ブルデューの主張とは異なる角度から検討すればよいのだが、以上の問題は必ずしも矛盾ではなく、その試みも不可能なものではない。ただし、それによって、ブルデューの社会批判の姿勢が必ずしも重要ではないことも同時に明らかにされる。以下では、この問題について検討していくことにしたい。

社会構造に規定されている主体が、その社会構造を超越することができるのかという先のアポリアが擬似的な問題であるのは、端的にいうと、そもそも主体化のプロセスが、決して完遂するものではないからである。主体化という概念とは、これまでの文脈に沿って示せば、ハビトゥスが諸個人に習得され、主体として構築されていくプロセスを指している。ただし、諸個人が構築されるということは、決定されているということと同義ではないことを、まず確認しておかねばならない。決定性と構築性とはまったく逆の状態を指すといってもよい。つまり、決定されているという性質は、個人の各々の行為が社会構造に関与する効果やたらきかけの不可能性を示すが、構築されているという性質は、むしろ社会体制に関与する行為の可能性であり、そうした行為の条件を与えるものである。

では、それはどういふことなのか。ハビトゥスの習得のなかでの主体化の契機についてみれば、そのことは明らかと

なるだろう。まず、ヘビトウスが習得される契機は模倣行為にあった。たとえば人間のコミュニケーション能力の習得も模倣から始まるが、それは抽象モデルの模倣ではなく、つねに具体的な他者のしぐさや発話の模倣である。もし仮に一般化されたモデルを模倣するのであれば、そこには対象を解釈する模倣者自身の思考が介在していることになるが、ひとは単に他者の身振りや言葉が無思想的に繰り返して学ぶ真似ど。この場合の習得とは、身体的・物質的な位相が、心的・観念的位相に変換されていくものである。模倣はつねに繰り返されるものであるために、諸個人の思考は必要な要素として要請されず、あらかじめ主体は定点としての位置を保証されてはいない。たとえば、儀礼はただ定型の所作をおこなうこと自体が目的である模倣行為であり、その際、個人主体は行為に先立つものではない。儀礼の端緒はそれが反復されること自体を、同語反復的に先取りしていることである。主体 *subject* の語源である *subiectum* には、もともと「基体 *substratum*」とはほぼ同じ意味があったが、儀礼や模倣において、この基体の位置にあるといえるのは、反復の形式それ自体である。つまり、「持続しているために持続する」ということにみられる伝統主義的論理がそれにある。あるいは、貨幣が交換されるのが、それが交換可能であることに基づくという転倒の論理を例に挙げることもできよう。いうまでもなく、このような自己言及性をもつ儀礼の同語反復の論理は、貨幣がそれ自体に内在する価値ゆえに交換されるのではなく、交換可能性が先取りされることで交換価値が生じるということと同じく、儀礼の内容自体にそれが反復される本質を求めることはできない。儀礼的所作が繰り返される理由を、それが理に適った正当なものであることに言及するような認識の合理化は、儀礼の与える秩序にひとを自発的に従わせるために事後的に生みだされる錯覚であり誤認である。

ある儀礼行為を方向づけている主体は基体が、反復という形式に帰着することは、行為性にとって、諸個人の主体性はアプリオリではないということを意味する。諸個人の主体性は、行為のプロセスがもつ効果としてその都度、派生的に構築され、書き直されるものであり、行為を発生させる基盤ではないのである。

むろんこのことは、単に模倣や儀礼、貨幣の流通のみに限られるのではなく、行為一般が共有する性質といえる。諸個人の身体がおこなう言語行為や身振りそのものは、特定の行為者が発案したものではなく、既に先行して存在しているものの反復である。行為者は、状況に応じて既存のハビトゥスを分節化して模倣し引用する。諸個人は先行しているなものかを流用しているのであり、その模倣のなかで行為に備わる変換可能なハビトゥスを文字どおり体得し、主体化する。だからこそ主体が構築されているということは、行為をあらかじめ決定するのでも不可能にするのでもなく、逆に行為を可能にする条件を与えているのである。ただし、反復の形式には、時間と状況との交錯のなかで、言葉や所作の断片がそれまでのコンテクストから切り離され配置が変わるアレンジメントによって、新たに異なる効果を現実化するプロセスが含まれている。つまり、これまでと異なる時間やコンテクストと接合することで編成し直される断片には、それまで現働していた意味とは違う効果を顕在化させる力が潜勢しているのである。

それゆえ、社会体制のなかで構築される存在である個人が、能動的な行為を自律的に起こす主体し基礎となることを希求し、自らを規定する体制からの絶対的な自由を求めるというのであれば、それは達成不可能な幻想に陥っていることになる。問題の焦点にすべきは、主体の行為を産出した既存の体制の起源や正当な根拠でもなく、また個人の能動性や創造性の有無でもなくて、行為の遂行性そのものである。主体化が完結されることのないままに、行為の反復に開かれていることは、行為を規定したり起点となるような基盤に遡及する必要がないことを意味している。先述のとおり、行為の遂行とはアレンジメントであり、つねに既存のものからの微細なズレ（差異化）を引き起こす可能性を潜在させているのである。それは、すでに構築されているものの模倣し引用のやり方の中に、社会秩序の動揺や瓦解の契機を見いだすことの可能性を示唆する。そしてこの契機においてこそ、単に社会に従属しているのではないかたちでの「主体化」が生起しているということになる。

そして逆に、ある行為が既存の秩序を維持し強化したのであれば、そのやり方が問われることにもなる。たとえば、



ジュディス・バトラーが指摘するとおり、侮蔑発言には、既に存在する侮蔑語自体に問題があるというよりは、むしろそれをどのように使用したのかという発話者の責任が問われる。

「侮蔑発言をする人は、侮蔑発言をどう反復したかということに対して、また侮蔑発言に再び活力を与えたということに対して、また侮蔑し傷つける文脈をふたたび作ったということに対して責任がある。話者の責任は、無から言語を作りなおしたということではなく、自分の発言を制約し、同時にそれを可能にさせている言語使用の慣行をうまく扱ったことにある。この種の責任感を理解するためには、われわれは最初から純粋な存在などではなく、自分が使う言語によって形成されている存在であることを理解する必要がある<sup>19</sup>」。

以上のバトラーの指摘から、ブルデューの意図に反していることは、諸個人の行為に社会体制に対するなんらかの関与——再生産の場合もあれば、転覆や破壊の場合も含まれる——の可能性が残されているとすれば、階級構造のような社会体制そのものを争点におく大文字のポリティクスとしての「理性の現実政治」にあるというよりも、存在被拘束的な思考や行為の存立条件に対して、個々がいかに関わっているのが問題化される。つまり、個人主体の思考能力は、模倣や反復の行為をどのような文脈のなかに接合するのかが現場の暫定的な倫理や、いかなる効果を生みだしたのかというミクロな政治的責任を考慮に入れなければならないことが明確になる。こうした問題設定は、行為の基盤に言及することなしに、行為の遂行に対する批判や異議申し立ての場をつねに開いておくことになるのである。<sup>19)</sup>

### 中間にある関係

さて、ここで確認しておいた方がよいかもかもしれないが、本稿は必ずしも社会批判のために必要な主体の可能性を模索する試みではない。社会と個人の間関係を捉え直すことを課題としてきたのである。しかしながら、ギデンズやブルデューの社会学論の検討をとおして得られる知見は、結局のところ行為や慣習的実践を媒介とした社会と個人の相互依存関

係であり、そこで得られる主体性の復権とは構造の再生産に能動的に加担するものでしかないことが確認されたのだ。た。

こうした認識にいたり、しかも社会的不平等の再生産が厳然と示される場合には、自己の認識や行為を産出する基盤そのものの瓦解や転覆のアプローチを模索することも必然的に要請されてくるのだろう。ブルデューのように、社会批判の拠点として「理性の現実政治」を唱えることにもなるわけである。

しかし前節で論じたことは、そうした大上段からなされる社会批判のための理路を探るのではなく、むしろ構造やハビトゥスといった行為の基盤を措定したり、あるいは個人の主体性に遡及する必要のないことを示したのである。そしてそれによって、行為の効果自体を問わなければならないとする論理を同時に導き出すことにもなった。換言すれば、行為者の背後にハビトゥスを想定して、行為やその結果をハビトゥスや社会体制に収斂されるものとして理解するのではなく、行為の遂行性が問題の争点となる。つまり、このように捉えることによって、行為を単に社会と個人を媒介するものとみなすことにも、行為の意味づけ効果をハビトゥスに帰責させることにもならず、社会的諸条件のなかでどのようにそれを使用したのかということに焦点を合わせることが可能になる。そもそも、既存の秩序の形成機序に対するブルデュー的批判や変革、転覆の試みが、自己の解放や自発性の回復を無条件に意味するのかどうかは必ずしも自明ではない。要するに、「主体性の復権」を問題の中心におくようなことは枢要ではないのである。

この問題について少し観点を変えれば、「主体性の復権」を模索する企図は、社会と個人がそれぞれ別々の存在として捉える両項の外在的関係を前提にすることで引き出されるものといえる。ギデンズとブルデューはそれぞれ異なる論脈ではあったが、社会がなんらかの拘束力をもった影響を個人に与え、個人も同様に社会の構成に加担しているという相互依存にある二項の外在的関係の仕組みを理論化したわけである。そして分析手続き上、このような二項図式がアブリオリに設定されているために、行為や実践が社会と個人の媒介となるように概念化され、行為者の主体性が問題構制

の争点におかれる。しかし、社会と個人がすでに構築されているものとなつてゐるために、あらゆる変化は社会や個人に言及されるかたちで回顧的に解釈されることになる。ブルデューであれば、変化をハビトゥスのもつ変換可能性に起因するものであるかのように還元するのである。言い換えれば、社会構造あるいはハビトゥスに変容があるとみなされても、各項の個別の同一性はあらかじめ確保されているゆえに、個人の主体性と社会秩序の再生産構造を両立させるような理論体系を苦心して練り上げる作業に陥つてしまう。

とはいえ、ブルデューとギデンズの社会理論が対象としていた社会が、限定的で恒常性をもつた社会形態であるために、彼らの理論が有効性をもつていたと理解することもできるだろう。ブルデューは北アフリカのカピリアや南仏のペアルン地方のようないわゆる伝統的社会や、階級・家族・芸術などの限定的な「場 champ」をフィールドとしており、ギデンズは産業社会を対象にしてきた。端的にいつて、これらの社会に共通することは、諸個人の属性がそれぞれ明確で、特定の規範やハビトゥスを内面的、身体的に保持する成員によつて構成されているということである。位階秩序のような社会的布置関係が再生産される傾向の強い社会形態であるといえる。それゆえ、社会と個人を外在的關係に指定した上で、行為や実践を媒介とした再生産の機制を提示することは妥当な結論であつたといえるかもしれない。

しかし視点を反転させて、先述のとおり行為の遂行性そのものから捉え直してみれば、そこにはふたつの流れがみえてくることになる。すなわち、一定の秩序や法則を形成していく構造化あるいは制度化のラインと、そうした秩序から逃れていくような主体化、あるいは創造性のラインである。そのような視点をとつた場合、社会や個人主体と名付けられているものは、その中間にある行為のプロセスから派生した効果や痕跡ということになるだろう。つまり、社会と個人を媒介し関係づけるとみなされていた行為自体が実在的なものとなる。二項の「関係」、あるいは「中間にあること in-between」が、「社会」と「個人」に先行して存在するというわけである。中間にある関係そのものは、先行する項がなければ成立しないというのでなく、すでに関係が生じているからこそ、その関係を示す諸項が成立し、位置づけら

れるのである。このような議論の転回を踏まえれば、変化とは社会や個人を基盤にするのでも、二項に帰属するのでもなく、「中間にあること」自体に内在しているということがわかる。二項は「中間」から派生している帯域とみなされるのである。実際、個人抜き社会は想定不可能であり、社会の外部にある個人を想定することもできない。両項は不可分であり、その成立は同時的で同体的なものと考えられよう。<sup>(20)</sup>

それでは、行為の遂行性から、あるいは中間そのものから社会的認識をはじめの場合、どのような社会形態に対して有効なベースベクトイヴとなるのだろうか？ おそらくそれは、ジル・ドゥルーズが「管理社会」と名付けた現代社会に対するものとなる。

### 三 規律社会から管理社会へ

#### 主体と規律化

ブルデューやギデンズが社会理論の対象として扱った伝統的社会や階級社会、産業社会等は、確かにそれぞれ異なる社会形態ではあるが、ともに限定的な空間内部にひろく浸透している価値体系をもち、それに連動しながら能動的に行方を志向する諸個人からなる集合である。個人のあり方は、たとえばD・リースマンの分類を用いれば「伝統志向型」「内部志向型」「他者志向型」として区別することも可能であろうが（前者が伝統的社会に、後二者が階級社会と産業社会に対応する）、いずれの性格類型にせよ、自己の意識が自らを取り巻く世界を構成する現象学的な「志向性」によって弁別できるとみなされている点で共通している。こうした個人の志向性に沿って分析をおこなうのであれば、諸個人の内面とその構築のメカニズムは不可欠な対象となる。

このような点は、ミシェル・フーコーの扱った一八世紀から一九世紀の西欧社会とも共通するといえるだろう。フーコーが描出したのは、パノプティコン一望監視施設で象徴的に示されるような社会空間のすみずみに浸透する規律訓練型の権力であり、

そしてその権力作用がもたらす人間の個別化と規格化がなされる社会であった。こうした社会は、学校や家族、病院、軍隊、工場、監獄といった諸制度が促す規律の内面化をとおして諸個人を主体Ⅱ臣下として産出する。むしろ、主体は権力作用を帯びながら行為を自発的に遂行していることが示される。

しかしながら、現代はフーコーが論じた規律社会から徐々に脱却しつつある社会である。フーコー自らは、その具体的な分析に取り掛かることはなかったものの、「かつてあれだけ権力を支えるのに有効だった規律が、いま効力を失っている部分がある」と述べ、規律社会のほころびを幾分か承知していた。

「近年、社会も変わり個人も変わってきた。多様で多彩で自立的になってきた。規律に縛られないタイプの人間がふえ、規律ぬきの社会発展を考えざるをえなくなっている。支配階級には旧態依然たる技術がしみついているが、現代の規律社会のあり方を将来、私たちが断ち切らねばならないということは考えられて当然だ。」<sup>(21)</sup>

近代の統治技術がもつ権力作用が、諸個人の内面を規律化しているのであれば、行為の動機や意図が統制的機能を果たしていることになる。つまり、諸個人は内面に保持する価値観や道徳を準拠棒において、一定の軌道に沿った行為の様式を能動的に実現する。権力の直接の監視が届かなくとも、各自に植え付けられた「良心」に従いながら、社会秩序に自動的に同調するのである。しかし、自己規律化を經ていない「規律に縛られないタイプの人間」は、多様で流動的な状況にその都度触発されるかたちで、内的に首尾一貫しない多様な行為を紡ぎ出す傾向を強くもつだろう。こうした行為の被触発性は、ハビトゥスを背景にした実践が、複雑な状況に即興的に対応しつつも結果的に「場」の価値体系に符合するというような性質を示しているものではない。つまり触発された行為は、諸個人の能動性や志向性に基づくというよりは、その場その時の状況との交差に強く依存する受動性によって非決定のままにおかれるのである。だからこそ、逆説的にも思えるが、社会秩序に対する個の自立性や個別性、分散性が顕著にもなる。

規律社会であれば、権力作用は、行為や判断の基盤となる内面を画的に産出し統御することに集約されるが、自己

規律化がすでに有効に機能しなくなった社会であれば、統治のあり方は多様な個人の行為を、あるいは情報やコミュニケーションを、直接監視し制御する傾向を強めることになる。

### 現代の管理社会

以上のおり、ごく簡単に論点を先取しておいたが、こうした現代社会を検討する際に有効な手掛りとなる概念を提出しているのが、ドゥルーズの「追伸——管理社会について」である。数頁たらずの試論とはいえ、このなかでドゥルーズは、現代の社会形態を「管理社会」と名付け、その簡潔なイメージをわれわれに与えている。ドゥルーズは、フォーの議論を援用するかたちで、管理社会をそれに先行する「君主型社会」と「規律社会」に对照させて分類している。それぞれは、支配の形態によって分けられる。まず、君主型社会はその名称が示すとおり、超越的な主権者としての絶対君主による、外からの支配形態である。端的には、個人の生命を取り上げ、死の決定を下す際に駆動する権力（生殺与奪権）に基づく支配である。この君主型は、成員の生産の一部を徴集することを支配の目的とするが、その後を受けるかたちで出現した規律社会の場合、生産を組織化することに統治の重点がおかれる。前述のとおり、規律社会は、近代諸制度によって規範を内面化した諸個人を媒体として秩序を形成するが、それは生産を組織化し強化する体系と連関しているのである。この社会形態では、諸個人は人口として捉え直され、経済プロセスに埋め込まれた貴重な労働力とみなされていく。したがって、ひとの生命をめぐっても、フォーが示したような「生命—権力 bio-pouvoir」<sup>(22)</sup>、すなわち、死を遠ざけ生命を与える契機に関与する権力が駆動することになる。福祉国家のような国家形態も規律社会のひとつのヴァリエーションといえよう。

この規律型の社会形態では、かつて「守護すべき君主の名において」なされていた戦争も、「国民全体の生存の名においてなされる」<sup>(23)</sup> ようになるのであり、二〇世紀前半に頂点に達したナショナリズムの展開とも密接に関係していた。

しかしながら、この規律型は二度の世界大戦を境に徐々に瓦解していく。ドゥルーズがいうには、フリーコーの描き出した「規律社会とは、すでに私たちとは別の、もはや私たちとは無縁になりつつあった社会なのである」<sup>(24)</sup>。そして入れ替わって優勢になった管理社会が、従来の規律社会を支えた諸制度が陥っている危機を補うようにして編成されてきたのである。

それでは管理型の社会形態を、規律社会における諸制度の機能不全とも関連させながら、以下で簡単に示しておこう。まず、近年の家族形態の変遷でみられるような親の権威の失墜や核家族化、離婚率の増加などにそれをもっとも鮮明に現れており、不登校やいじめ、基礎学力の低下や教養主義の衰退などで示される学校教育の危機にもその一端をみるこゝとができよう。従来では、家族、学校、軍隊などによって規範を諸個人の内面に浸透するまでに訓育し、身体化された生活様式を身につけた主体に成型されることが主流であったが、現在では家族や地域社会が教育の機能を相対的に低下させ、学校制度も機能不全に陥っている。そうしたことに関連して、たとえば犯罪や逸脱行為においても、諸個人が自己規律化を十分に経ていないために、内面や動機がもはや行為の統制的機能を相対的に低下し、動機解明が犯罪や非行を理解するための重要なファクターではなくなりつつある。そしてときには、その原因が精神疾患や遺伝上の問題に関わるとみなされ、医師の判断が関与するケースさえ現れるなど、社会の医療化、あるいは医療の社会化が進行しているともいわれる。近代社会における医療化は、その対象を単に個人の疾病や障害に限定するのではなく、関与する領域を構築し拡張してきた。医療化は犯罪や非行のような社会問題にとどまらず、たとえば飲酒や喫煙、同性愛など、それまでは医療が対象としなかった領域にも踏み込んでいくことで、積極的な制御や管理のネットワークを拡げているのである。

医療化社会や病院制度の変容については、それだけにとどまるものではなく、規律型から管理型の社会形態への移行と密接に関わっている。進展する遺伝子治療や出生前診断などの予知医療、予防医学の領域において、それはとりわけ

顯著である。ドゥルーズは、この「病院の体制では、「医者も患者もいない」新卒の医学が、潜在的な患者や危険分子をあぶりだす<sup>(25)</sup>」とSF的にいうが、現在の医療技術の急速な進展を鑑みれば、こうした状況も必ずしもリアリティのないものとはいえないだろう。病院では、遺伝子工学の技術者の手によって患者以前の健康者や妊婦が治療を受けるということが日常的な光景になるならば、管理社会の理念型にもっと近づくものになる。

もちろん、このような極端な例を挙げなくとも、病気の社会化といえる状況は確実に進行しているのであり、以前では社会的な生活を送ることが不可能だった疾病や障害も、薬剤や移植医療などの進歩とサポート体制の充実などによって、一定の健康状態の維持、管理が可能になっている。それによって健康（標準）の対立項として病氣（異常）が社会的に排除されるのではなく、病氣自体も複数化された「標準」のひとつとなり、通常の社会生活の中に包摂されている。また死すらも、ターミナルケアでの「安楽死」や「尊厳死」というかたちで「適度に社会化」し、人工的なものとなりつつあるのである<sup>(26)</sup>。

資本主義経済では、産業社会から情報化社会への移行が、規律社会から管理社会への移行とほぼ並行している。それは、工場における生産サイドの重視から、企業のマーケティングやデータベースのような消費サイドにおける経営戦略が重要度を増している局面において象徴的にみられる。たとえば、フォードシステムのような生産ラインに重点を置いた大量生産追求型から、トヨタシステムの「かんばん方式」に代表される部品の組立ラインが生産を調整するシステムのような消費動向への即応型やリスク管理型の企業戦略が主流になっている<sup>(27)</sup>。末端から中枢へ向かう情報の流れのなかで、経済活動の意志決定が方向づけられているのである。POSシステムやジャストインタイムを実現するネットワーク化された生産・流通システムなどもその代表例であろう。

もちろん情報化社会においても生産が軽視されることにはならないが、重要な点は、情報技術産業を中心にして他の産業が調整される傾向を強めるということである。それまでの産業資本主義が優勢だった際には、農場が工場（プラン



ト)のようになり、農民がプロレタリア化したように、農業が商工業部門を基軸に変容を受けてきた。今日の情報資本主義では、情報収集と処理、およびその対応への速度が、生産コストの削減以上に利潤創出のための大きな比重をもちつつある。その結果、マイケル・ハートがいうように「資本が労働から独立し、自らの力動的な基盤として労働に依存することのない資本主義社会を現出するという<sup>(28)</sup>」状況が現実味を帯びてくる。資本は労働者から離れていき、情報化の展開のなかで、より純粋な形態での資本のプロローが生まれているのである(株式や債券などの金融商品に関してはいうまでもない)。こうした資本主義の展開のプロセスにおいては、消費者の多様性や流動性に強く影響を受ける傾向が生じることになる。実際、商品やサービスの標準は単一ではなく、前述の医療の問題と同様、多数化している。つまり、一部のマニア向け商品もインターネット上で取引されるように、もはや「特殊」や「逸脱」は「標準」の対立項として外部に排除されているのではなく、社会的、経済的に操作可能なものとして独り立ちし、資本主義経済の内部に位置を占めて埋め込まれているのである<sup>(29)</sup>。そして、いうまでもなくこの状況は、規律社会に代わって管理社会の形態が、可変的で柔軟な調整をおこなっていることを示している。

こうした規律社会から管理社会への移行は、資本主義が本質的にもっているダイナミズムに基づくものである。資本主義は、新たな形態へ生成変化しながら、それまでの形態を断片化し保存しつつ、増殖していく機制を備えている。卑近な例では、失われつつある農村文化は、希少価値を持った古き良きノスタルジーを表象するパッケージ商品として観光産業に取り込まれ残存する場合もあるし、世界各地に残る諸民族の土着文化は、ピカソがアフリカ文化をデフォルメしたように、モダンアートに取り込まれて、資本主義市場を流通する。ブライアン・マスマがいうように、民族衣装や音楽は、モードの循環の中に組み込まれている。資本主義はそれ以前のを当時のコンテクストから切り離し、アレンジメント、すなわち異種要素間の組み替えを施しながら、過去の形態を現代に並置し包摂しているのである。

「マルクスのメタファーによれば、資本主義はヴァンパイアである。それは先行形態から価値を搾り取るが、

殺害することでそれらに永遠の生命を授けている。ドゥルーズとガタリの言葉では、資本主義は「これまで実在していたすべての雑多なコレクション」である。たとえば、部族社会は保存するために移管され、中産階層の世界旅行市場を拡張するための基盤になる。彼／彼女らのアートや音楽、衣装の要素は、ゲットー化された社会から、娯楽やファッション産業の周期性の中の無限の循環へと引きずり込まれる。その戦略は循環的な地層化のひとつである。つまり、前資本主義的な形態の諸々の断片は付与されたテリトリーの組織化によって保護され、土地の区域に一致してもしなくても、いつも明確な社会的地層として法的、手続的に形成される。その地層は、脱領土化の循環（再表象）を含む資本主義的物価安定のプロセスによって完全に包摂される。脱領土化された循環のレベルそれ自体は、ひとつの地層、つまり抽出する干渉として定義されるコミュニケーションの地層を構成している。このすべては、資本主義の付加性の原理 *the principle of capitalist additivity* と呼んでよい<sup>(30)</sup>。

ここでB・マスミが示唆するのは、資本主義の展開でみられるような既存の体制を堆積していきながら、自身を変容させていくダイナミズムが、規律社会から管理社会への移行のあり方と同じ状況を示しているということである。資本主義の「付加性の原理」は、既存の文化や価値体系、制度といったあらゆるコードを脱文脈化して取り込みつつ、布置関係を変更するアレンジメントを生じさせることで、それぞれのユニットや全体のネットワークが新たな意味や効果を現働化することになる。こうした機制は、管理社会が規律社会の機能不全に対応し、調整している状況と軌を一にしているのである。つまり、この管理社会への移行は、規律社会が消滅した後に出現する形態ではなく、規律社会の諸制度が単一では規律化が不十分になった状況において、それを補完するように既存の諸制度が「開放的であつ連続的な管理のさまざまな配置<sup>(31)</sup>」に置かれ、相互に連動し調整するように形成されているのである。

たとえば、多くの国で、学校教育が「生涯教育」という体制の下で際限なく引き延ばされ、奉仕活動が軽犯罪の処罰に代用され、学校や企業の中でも制度化されているように、家事や地域活動と教育や企業活動、司法制度が相互に浸透

していることがその一端を示しているだろう。「規律社会では（学校から兵舎へ、兵舎から工場へと移ることに）いつもゼロからやり直さなければならなかったのにたいし、管理社会では、なにひとつ終えることができない」とドゥルーズ<sup>(32)</sup>はいう。危機を告げられている家族や学校、司法・監獄制度のようなサブシステムは、その機能が分解し、解消されているのではなく、むしろ諸制度の壁が亀裂を起こすことによって、それぞれの機能が拡散し、制度間で相互に連携するネットワークを作り上げ、より洗練されたかたちで作動するようになっているのである。

### 平滑と条里

本章のまとめとして、規律社会と管理社会を「条里空間 [espace strié]」と「平滑空間 [espace lisse]」という概念を用いることで、図式的な整理をしておきたい。このふたつの概念は、ドゥルーズとガタリの『千のプラトー』で提出されているものである。この概念はゲームのメタファーによって示すのが適当だろう。<sup>(33)</sup>

まず、条里空間は規律社会に対応するものだが、それは「将棋（チェス）」にたとえられる空間概念である。端的には、将棋では、駒の総体がコード化されていて、それぞれの駒は内的な属性を備えている空間を構成している。つまり、この条里空間の構成要素は、桂馬がつねに桂馬であり飛車はつねに飛車であるように、ゲーム中のいかなる状況下においても、つまり、それぞれの駒が「全体」や他の部分に対してどのような布置関係にあるかは関係なく、その属性が変わらずに固定したまま、全体の秩序を形成している。

一方の平滑空間は、管理社会に対応するものであり、それは「囲碁」にたとえられる空間概念である。碁石は将棋の駒とは異なり、内的な属性をもたず、状況的な特性しかもたない「数的な単位」である。進行するゲーム全体の布置関係にしたがって、碁石という要素の特性は絶え間なく変動している。そして同時に「ただ一個で共時的に一つの布置全体を無効にすることができる」。つまり、それぞれの意味や全体の秩序は外的に決定されるが、その決定も暫定的でそ

の場限りのものにすぎない。

このようなゲームのメタファーによって理解されるように、条里空間Ⅱ規律社会での個人は、特定の社会集団に帰属しその内部で独立した属性が固定的に決定されているので、分割不可能な個人 *in-dividual* となっている。もちろん、個人はいくつかのサブグループ（たとえば家族、学校、職場、エスニック・グループ、国家など）に属し、複数の役割や資格を備えているが、そのサブグループ自体が、高次の社会体制を構成しているために、諸個人の複数の属性を統括する社会的自己を内的に保持しているといえる。そして、規範やハビトゥスに基づいて、個人は社会と外在的な相互規定関係にあるということになる。

しかしながら、平滑空間Ⅱ管理社会における人間の場合、部分集団に帰属している場合でも、個人の属性はトータルに捉えられず、布置関係において暫定的に決定されている意味をもつのであり、個人は分割可能な一要素として現働化しているにすぎない。別の環境に移ったときには、その移行にともなう異なる効果が新たに顕在化することになる。それは、管理社会全体のみで連動して調整されるわけであるから、個人は可分性 *dividual* の数的な素材になっているのである。

したがって、管理社会での個人の行為は、その布置関係のみでの被触発性によって引き出される。それは規律社会の個人が、主観的な志向性によって内的に決定している状態とは異なる。つまり、基石が他の基石との中間そのもの内で生起している緊張関係によって意味や効果が引き出されるように、管理社会での個人の行為は、中間にある関係性そのものから、触発されて惹起されているのである。すなわち、この場合の行為の主体性とは、個人にあるのではなく、ゲームの進行の中で絶え間なく変化する関係性そのものに内在しているといえよう。そして個人は、それに応じて受動的におかれた準客体ということになるだろう。

ただし、平滑空間は条里空間的なものを備えている。つまり、囲碁に多数の定石があるように、管理社会は資本主義

の「付加性の原理」が包摂している無数の制度や文化、規範、価値体系、ロジック、イデオロギー、物語等のコードを堆積しているのである。そうした多数の潜勢しているコードは、状況において変動する布置関係の中間において組み替えられ、アレンジメントを施されながら現働化する。それが行為の遂行される契機である。そして同時に行為の結果、新たに生じるコード化がこれまでのコードの堆積層に付加され、保存される。したがって、変化を生じさせるのは、個人の属性でも社会全体の構造でもなく、諸個人の間にある関係性そのものにおいて生起する、ある種の強度をもった緊張関係である。この緊張関係をもつ「中間 in-between」は抽象的な位相での実在であるが、この平面において、平滑空間が堆積してきた多数の条里的なコードが引き込まれ、異種要素間の組み替えが生じることで行為が産出されるのである。そしてそのプロセスのなかで新たなコード化も同時に進行していることにもなっているのだ。

前章で論じたように、行為性にはそれを決定づける基礎付けはない。むしろ、行為に影響を与える複数のコードは、中間にある平面に内在することで、はじめて引き出され駆動するのである。そして状況の複雑性と、それぞれのコードが状況に応じた強度をもっているために、その交錯のなかで遂行される行為は、非決定のままにおかれていることになるだろう。

こうして、行為のプロセスにおいては、生成したコードが堆積し地層化していくラインと既存のコードをずらし、その秩序から逃れていく主体化のラインが同時に生成していることとなる。管理社会における「社会的なもの」と「個人的なもの」が、両項の間にある「中間」の派生であり、効果であるということは、こうしたふたつのラインが生起している空間の出来事を、抽象的には指しているのである。

## 結 語

現代の管理社会における諸個人の行為は、自らの能動性や志向性に準拠するのではなく、状況に対する受動的な被触

発性によって生じるものであった。この社会では、諸個人は中間に生起する強度に触発されることによって、個人の生の様態が姿をあらわすといってもよい。

だが、それは個人が単純な受動性におかれているということではない。資本主義の付加性の原理が、これまでのさまざまな文化やロジック、価値、規範等を包摂し、それらを新たに組み替え調整することによって多くの流れを生みだしているように、個人もまた、より多くの多数性を自らの内に備えることによって、投げ入れられている布置関係のなかにおいて十全な生の様態を紡ぎ出すことができるだろう。したがって、諸個人がもつある種の能動性は、具体的な行為の遂行にあるというよりは、状況に応じた多様な行為を生み出す可能性を潜勢しておくことにある。こうした関係性の世界のなかでは、かけがえのない自己の固有性を構築しようと試みる近代主義的人間像とは異なり、個が状況に触発される契機において、いかにより多くの仕方<sup>(34)</sup>で触発される潜勢力を備えているかということに、生の創造性が賭けられている。自らの内にどれだけ多数性を充填させるかに、より豊かな生の様態は懸かっているといえるだろう。むしろ、そうした生の力を顕在化させるのも、また充填させるのも、具体的な行為の中にある。現代の個人の生は、自らの内部で充足することにあるのではなく、外部との結節点のなかで触発される行為のプロセスにおいて、つねに生みだされている<sup>(34)</sup>。

注

- (1) Pierre Bourdieu, *Le Sens Pratique*, Editions de Minuit, 1980, pp. 51-70. (今村仁司・港道隆訳、『実践感覚 1』、みすず書房、一九八八年)。
- (2) ロバート・K・マートン、『社会理論と社会構造』、森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳、みすず書房、一九六一年(原著、一九四九年)、五九頁。
- (3) アンソニー・ギデンズ、『社会理論の最前線』、友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳、ハーベスト社、一九八九年(原著、一九七七

年)、二三二―二三八頁。

- (4) Anthony Giddens, *The Constitution of Society*, Polity Press, 1984, pp. 374-375.
- (5) Anthony Giddens, *The Constitution of Society*, op. cit., p. 5.
- (6) Pierre Bourdieu, *Le Sens Pratique*, op. cit., p. 26.
- (7) Pierre Bourdieu, *Le Sens Pratique*, op. cit., p. 32.
- (8) Pierre Bourdieu, *Le Sens Pratique*, op. cit., p. 31.
- (9) Pierre Bourdieu, *Le Sens Pratique*, op. cit., p. 26.
- (10) Pierre Bourdieu, *Le Sens Pratique*, op. cit., p. 88.
- (11) Pierre Bourdieu, *Le Sens Pratique*, op. cit., p. 94.
- (12) Pierre Bourdieu, *La Distinction : Critique Sociale du Jugement*, Éditions de Minuit, 1979, p. 112. (石井洋一郎訳『チンス タンクシオン 1』藤原書店、一九九〇年)。
- (13) ジョージ・マーカス、「現代世界システム内の民族誌とその今日の問題」、『ジェームズ・クリフォード／ジョージ・マーカス編 『文化を書く』』春日直樹・足羽与志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子訳、紀伊國屋書店、一九九六年(原著、一九八六年)、三二六頁。
- (14) ポール・ウィリス、「ハマータウンの野郎ども―学校への反抗 労働への順応―」、熊沢誠・山田潤訳、ちくま学芸文庫、一九九六年(原著、一九七七年)、二九〇頁。
- (15) Pierre Bourdieu, *Choses Dites*, Éditions de Minuit, 1987, p. 184. (石崎晴己訳『構造と実践』新評論、一九八八年)。因みに「ブルデュードよると、ウィリスの研究をフランスで紹介したのはブルデュー自身だという (ibid., p. 55.)」。
- (16) Pierre Bourdieu, *Le Sens Pratique*, op. cit., p. 40-41.
- (17) ビエール・ブルデュー、今村仁司、廣松渉、「ハビトゥス・戦略・権力」、『ビエール・ブルデュー―超領域の人間学―』加藤晴久編、藤原書店、一九九〇年、二〇二―二〇四頁。
- (18) Judith Butler, *Excitable Speech : A Politics of the Performative*, Routledge, 1997, p. 27. (同書 Introduction は、竹村和子訳『触発する言葉』、『思想』第八九二号、一九九八年一〇月号に訳出)。

〈社会的なもの〉と〈個人的なもの〉における非決定性の関係論

(19) 本章の行為の遂行性の理論や基盤主義（基礎付け主義）への批判に関しては、バトラーの議論に多くを負っている。とりわけ、Judith Butler, "Contingent Foundations: Feminism and the Question of Postmodernism", Judith Butler and Joan W Scott (eds.), *Feminists Theorize the Political*, Routledge, 1992, pp. 3-21. (中馬祥子訳「偶発的な基盤付け—フェミニズムと「ポストモダニズム」による問い—」『モンシキ』第三号 二〇〇〇年)。\*よち、*Exilable Speech: A Politics of the Performative*, op. cit.

ただし、補足的にバトラーの議論について注意しておくべき点をひとつ挙げておくと、既存のものの流用や引用による意味の逸脱や異化作用が、抵抗の戦略になりうると主張する点である。こうした行為のやり方については、十分な留保が必要である。たしかに模倣や真似をおこなう反復のパフォーマンスは、本質的にパロディや不真面目なつながり、正統や権威、純粹というような支配的構造を構成するカテゴリーを攪乱し、転覆する可能性をもつかもしれない。しかしこうした戦略は、先述したようなブルデューの社会批判の立場が正統、権威、純粹などのカテゴリーを承認してしまうのとは正反対であるものの、パロディが威力をもつためにはこのようなカテゴリーが必要であるため、それらを結果的に裏支えしてしきう可能性をもつものである。Judith Butler, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge, 1990. (竹村和子訳「シモンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱—」青土社、一九九九年)を参照のこと。

(20) ブライアン・マスキ、「帰属の政治経済学と関係の論理」小町谷尚子訳、『思想』第九一四号、二〇〇〇年八月号を参照のこと。

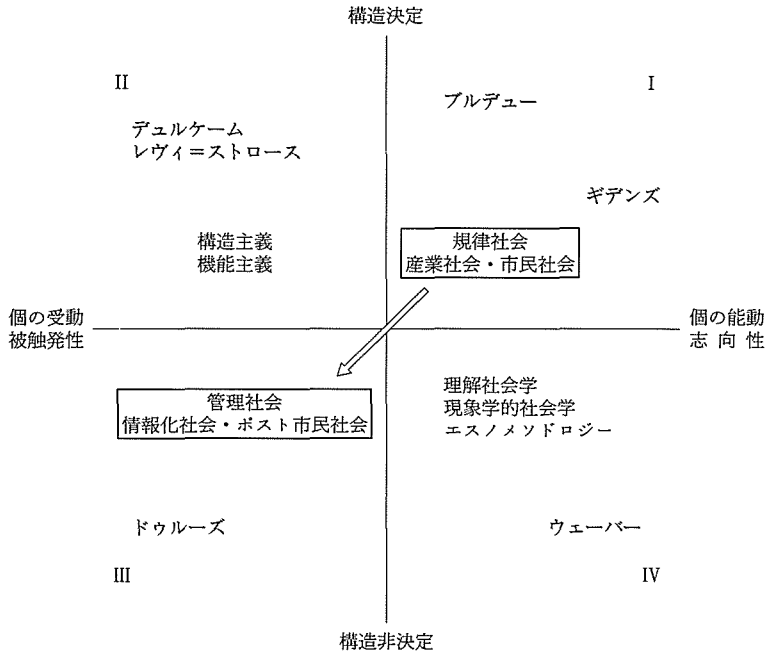
(21) Michel Foucault, "La Société Disciplinaire en Crise", (1978) *Diis et Écrits III*, 1994, Éditions Gallimard, pp. 532-533. 「危機に立つ規律社会」『シモン・フーコー思考集成VII』筑摩書房、二〇〇〇年。なお、初出はフーコーの二度目の来日の際になされたインタビュー記事（朝日新聞一九七八年四月一八日夕刊）。

(22) Michel Foucault, *Histoire de la Sexualité Vol. 1, La Volonté de Savoir*, Éditions Gallimard, 1976, pp. 178-182. (渡辺守章訳「性の歴史—知への意志」新潮社、一九八六年）。

(23) Michel Foucault, *Histoire de la Sexualité Vol. 1, La Volonté de Savoir*, op. cit., p. 180.

(24) Gilles Deleuze, "Post-Scriptum: Sur les Sociétés de Contrôle", *Particules*, Éditions de Minuit, 1990, p. 241. (宮林寛訳「記号と事件—一九七二—一九九〇年の対話—」河出書房新社、一九九二年）。





社会的なものゝと個人的なものゝにおける非決定性の関係論

(15) Gilles Deleuze, "Post - Scriptum : Sur les Sociétés de Contrôle", op. cit., p. 247.

(16) Brian Massumi, "Requiem for Our Prospective Dead : Toward a Participatory Critique of Capitalist Power", Eleanor Kaufman and Kevin Jon Heller (eds.), *Deleuze and Guattari : New Mappings in Politics, Philosophy, and Culture*, University of Minnesota Press, 1998, p. 57.

(17) トヨタシムナトニシテハ「以下をきいて包括的」で論じられている。門田安弘『「新トヨタシムナト」』講談社、一九九一年。

(18) Michael Hardt, "The Withering of Civil Society", *Deleuze and Guattari : New Mappings in Politics, Philosophy, and Culture*, University of Minnesota Press, 1998, p. 34. (大脇美智十訳「市民社会の衰退」『批評空間』第二期二一号、一九九九年)。

(19) Brian Massumi, "Requiem for Our Prospective Dead : Toward a Participatory Critique of Capitalist Power", op. cit., p. 57.

(20) Brian Massumi, "Requiem for Our Prospective Dead : Toward a Participatory Critique of Capitalist Power", op. cit., p. 53.

- (31) Gilles Deleuze, "Qu'est-ce qu'un Dispositif?", *Michel Foucault Philosophe*, Edition du Seuil, 1989, p. 191. (財津理訳「装置とは何か」『現代思想』第二五巻第三号、一九九七年三月号)。
- (32) Gilles Deleuze, "Post-Scriptum : Sur les Sociétés de Contrôle", op. cit., p. 243.
- (33) Gilles Deleuze & Félix Guattari, *Mille Plateaux : Capitalisme et Schizophrénie*, Editions de Minuit, 1980, pp. 436-437. (宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳『千のプラットフォーム』河出書房新社、一九九四年)。
- (34) 本稿で検討した社会理論の位置づけと規律社会から管理社会への移行を重ね合わせれば、前頁のように図示することができる。  
\* 邦訳書がある原文の引用の際には、訳語や表現を変更させていただいた場合があることをお断りしておく。

(筆者 のむら・あきひろ 京都大学大学院文学研究科研修員／社会学)

dem Gesetz abzuweichen ?

Ich möchte den Anhalt zu diesem Problem in “einem Faktum der reinen Vernunft” finden, das das Hervortreten des Gesetzes besagt. Diese Abhandlung interpretiert dieses Faktum als das Selbstbewußtsein der reinen Vernunft. Nach dieser Interpretation bedeutet das Gesetz dasjenige Bild der Vernunft, das erst dann entsteht, wenn die Vernunft ihrer selbst inne wird. Erst durch dieses Gesetz, d.i. ihr Bild, erkennt sie das, was sie ist. Erst durch dieses Selbstbewußtsein vermittelt des Gesetzes wird sie zu sich selbst. Die Abweichung von dem Gesetz muß ihre Wurzeln in diesem Werden der Vernunft haben. Auf Grund dieser Interpretation zeige ich zum Schluß, was das Rätsel des Ursprungs der Abweichung von dem Gesetz bedeuten soll.

---

## The Logic of the Indeterminable Relations between the Social and the Personal

On the Passage from Disciplinary Society  
to the Society of Control

*by*

Akihiro NOMURA

Research Student of Sociology  
Graduate School of Letters  
Kyoto University

According to sociological perspective, the person has generally been considered as a “social-being”, whose recognition and practices have been always-already regulated by the social conditions. This perspective was emphasized by the spread of structuralism which persuasively discusses the de-centering of the subject. The implications of structural determinism, however, have been opposed by the attempt to theorize the return of the subjectivity.

The leading sociologists of this critical perspective, Pierre Bourdieu and Anthony Giddens reconsidered the concept of the structure, and put forward the interdependent relationship between the structure and the subject. There are not a few different points between the two theorists, but Bourdieu and Giddens take up a common theoretical position under which the subject is not to simplify as the subjugated but is regarded as the agency with a certain activity. Their social theories don't accept the static relationship between the structure and the subject

but conceptualize the *structuration*, that is, the structuring process of social relations with a dynamism that accompanies the subjective agents. Their concept of the structure is the medium organizing the way of the agents and the outcome produced by them. To indicate the reflexivity that mediate between the society and the person, Bourdieu and Giddens established their social theories that subscribe neither structural determinism nor voluntarism.

Their reflexive sociology, however, shows merely the reproduction of the structure in spite of suggesting the activity of the agency. Their theoretical frameworks are inherently possessed of this aspect as their own limit. Both of them are to interpret consequently that the changes are reduced to the generative foundation of the given structure or *habitus*, by reason of presupposing the external relation between the society and the person which is mediated by the practices.

Is it possible to consider logically and empirically, however, that such a relation is an external one? It is unrealizable to suppose the society without the person, or the person being outside the society for all practical purposes. The society and the person are inseparably related to each other and simultaneously constituted. Bourdieu and Giddens give substance to the binomial relation that the agents mediate between the society and the person. We might think that such a suspect, binomial schema is what their analytic procedures call for, but the in-between that is indicated by this relation is the actual. Both what is called the society and the person are effects or derivations that internally arise from the in-between keeping the intensity. It would be better to regard the action not as the medium that is reduced to the structure or the subject but as the event that the in-between gives rise to. Such a point of view will enable us to consider the social and the personal as the internal lines that arise from the space in-between. The action is to perform in the moment excited by the intensity of the in-between, which has no determinant foundation.

This theoretical reconsideration would moreover give us the effective perspective in dissection of the contemporary society of control that Gilles Deleuze called.